

「出会う→変える」をシステムにする「新たなえにしを結ぶ会」

『雪』の論説－福祉を変えた科学の視点

後藤芳一



「今日お越しいただいた方の共通点は、現状に満足せずに、何かを変えようとなさっていることです。挑戦の精神があり、人とつながって新しいこと始めるのを厭わない方です…」

5月の半ば、東京で「由紀子さんの旅立ちをお祝いし、新たな縁を結ぶ会」が開かれた。

医療や福祉の社説を担当された大熊由紀子さんが、3月末に朝日新聞社を卒業した。大熊さんは同紙女性初の論説委員として、この国の医療・福祉の進歩を導いた。

4月からは、大阪大学大学院人間科学研究科教授の任にある。

結ぶ会は、大熊さんを中心とするネットワークをさらに発展させることをめざして開かれた。冒頭の言葉は、大熊さん本人による会の趣旨の説明である。

大熊さんのキーワードに「変える」がある。後日お伺いすると「現場で実践する人、制度や予算を動かす人(役所)、理論で裏付ける人(研究)、そして、ジャーナリストが出会うと変わる。やろうという人がいても、一人だと変わらない。つながらないとダメなようよ、経験的に。」との由。

この“大熊理論”からは、人をつなぐこと自体が重要な推進策になる。

結ぶ会には450人が集まった。大熊さんが伝えてきたメッセージと、つなぎ合わせてきた人の縁が道になった。「結ぶ会」は定期的に行われることになりそうだ。



大熊さんの視点は、「『寝たきり老人』のいる国いない国－真の豊かさへの挑戦」(ぶどう社、1990年)と「福祉が変わる医療が変わる－日本を変えようとした70の社説+α」(同、96年)という2冊の著書に記されている。読み返すと、依然として指摘の新鮮なことに驚かされる。

私事ながら、大熊さんに初めてお目にかかったのは、共用品の普及をめざす市民団体、E

&Cプロジェクト（現（財）共用品推進機構）の会合であった。94年の末、当時、筆者は新エネルギー・産業技術総合開発機構（NEDO）で医療福祉機器開発の仕事をしていた。

それで「寝たきり老人…」を読ませていただいた。「補助器具センターは地下室がすごい」とあり、北欧の事例をもとに、各種の専門家や機能をつなげてシステムにすることの重要性が指摘されていた。翌年筆者は、通商産業省に新設された医療・福祉機器産業室に戻った。大熊さんの指摘は「福祉用具センター構想」の予算要求につながり、通産省の福祉用具産業政策の最初の一步を決めた。

私事が長くなったが、その目で見ると厚生労働省の政策にも同じ傾向がある。特養を「何床」から「何人」へ、老人施設の一人当たり面積の拡大・個室化、拘束をなくす、介護労働の労働基準法上の問題、精神障害者の地域での生活など。

これらは大熊さんが指摘してきたことである。いまの政策が、二冊の中にある。

ところで、大熊さんの目線はどこが違うのか。記者の目か、人間性か、その他にも沢山ある「すごい」を合わせたものか。全部正しそうだ。

ここでは特に2点に注目したい。第1は「変えよう」という意志である。能力や権限を持ちながら、必要なときに用いないのは不作為である。大熊さんは「知らなかった」というのは、ナシよ」と信号を発し、「あなたは、何を変えるのかしら」と問うてくる。

もう一つ重要なのは、大学生時代までは科学者をめざしていたという大熊さんの科学の視点ではないか。事例を集めて個別対処に終始するか、それとも背景にある普遍的原理に目を向けるか。個人で動くか、それともシステムを作ってそれを動かすか。科学であることの違

いは、そういうところにある。なぜかを考え、組織を動かす。自然に動くしくみを作る。

大熊さんの足跡は、日本の福祉がこういう目線を必要としたことを示す。

2冊の著書での指摘が新鮮であることは、他方、課題が未解決であることを示す。「結ぶ会」は、出会う→変える、をシステムにする試みであり、大熊さんが着手した“次の一手”なのだった。



連載「遠望」21・2001年6月10日より

（後藤芳一さんは、経済産業省技術課長⇒大臣官房製造産業局担当審議官⇒大阪大学大学院工学研究科教授⇒東京大学大学院工学系研究科教授）